

序 章

楽園周縁観光論の新展開へ



楽園ハワイのイメージ
(ハワイ州観光局が2000年代にウェブで提供した壁紙用フリー画像)

全体の議論の導入に当たる本章では、本研究の問題の所在と、主題の画定にいたる経緯について論じる。第1節では、私が周縁観光論以前から宗教や観光を論じる際に採用してきた理論的・方法的枠組みの基盤を確認する。第2節では、「周縁観光論」つまり現代観光の周縁的現象の探究という、前著『周縁観光論』とも共有される議論枠組みを明確にする。第3節では、この周縁観光論のさらなる徹底を模索する中で、人類学的パラドクス論の探究という新たな議論枠組みを設定した所以を明らかにする。なお、序言で触れたように、人類学的パラドクス論の具体的内容については第I章で論じる。このように、私の研究の基点から説き起こしつつ、前著と本研究に共通する議論枠組みを整理し、前著とはまた異なる本研究の新たな主題の設定までを明確にすることが、本章の主たる内容である。そして、第4節では、第I章以下の方向性に触れ、本研究の議論構成を展望する。

第1節 観光の人類学的研究

本節では、これまでの私の研究（ex. 吉田 2005a, 2013b, 2020a, 2021b, 2022a(2018), 2023a）に共有され、本研究でも採用する、理論的・方法的な前提や基盤的論点を整理する。本研究は、おもに文化人類学——以下、「人類学」と略記する——の立場から観光とくに現代観光について考察しようとするものである。では、この観光の人類学的研究という点に、本研究がいかなる意味を込めているのか。本節ではこれについて4点を論じる。

既存の観光研究は、観光を産業や事業として捉える立場と、それら以外の側面にも注目し広く社会的行為ないし社会現象として捉える立場とに、おおきく分けられると考えてよい。もともと観光研究は、前者の立場の研究に先導されていた。岡本によれば、観光を主題とした学術的研究は、世界恐慌後の1930年代に国際観光の「見えざる輸出」(invisible export)の重要性に注目し、その経済的効果を測定しようとした経済学者の研究からはじまった（岡本 2001: 3-4, 21-22; 安村 2001: 25-37; 吉田 2013b, 2023a: 74-75; Cohen 2005a(1996/1984): 51）。一方、後者の立場の研究は、それに遅れて立ち上がり、それぞれの時代や社会における観光という社会現象が経済・経営あるいは産業・事業の次元のみに還元できない多面的・複合的なものであることを、ミクロな視点から民族誌的記述をもとに明らかにしようとしてきた。そうした研究の嚆矢といえるのが、ヴァレン・スミス編集の『ホスト・アンド・ゲスト』である（スミス(編) 2018a(1989/1977); 東 2018: 364, 365）。この論集は、ホストとゲストという異なる性格をもつ主体の接触に着目する観点から、特定の社会や時代の文脈に即して、観光という社会的行為・社会現象の具体的で多様なあり方を描き出そうとした。各地の民族誌的事例を通して観光の実態を記述し解明するその手法は、その後の人類学や社会学の観光研究を方向づけるものとなった（吉田 2022b: 33）。

本研究が人類学的な観光研究であることを標榜することによってまず意図しているのは、観光を経済学や経営学などの社会工学系のディシプリンが関心を寄せる論点に切り結めることなく、広く社会的行為やそうした行為の集積体からなる社会現象の総体を総合的に捉えようとする立場に立つことである。これが第1点である。

むろん、以上のような弁別は大雑把な類型化にすぎない。前者の社会工学系の観光研究と後者の人類学的観光研究との間に明確な境界線を引けるわけではない。また、この第1点は決して人類学を名乗る諸研究に限定される特徴でもない。たとえば、社会学や地理学などの観光研究にはそうした総合的な観点に立ったものがおおい。これらのディシプリンと人類学との境界線は、あってないようなものである (cf. ギデンズ 1997(1994): 186–187; 吉田 2023a: 39)。本研究において、「人類学的」は、これら類似のディシプリンを包摂するために採用した代表的指標である。また、後者の人類学的観光研究はそれぞれ特定の観点や論点に照準を合わせており、かならずしも個々の研究がおしなべて総合的研究を志向したり具現したりしているわけでもない。そのことは『ホスト・アンド・ゲスト』所収の諸論を一瞥しても明らかである。個々の研究は、たとえば帝国主義や経済二元論などといった特定の問題設定にもとづき議論を組み立てている。この点でも、観光研究の広がりを単純な類型化に切り詰めることはできない。

ただ、人類学やその周辺領域が、人々つまり観光に関わる諸主体による観光関連行為とその相互作用——かならずしも対面的で直接的な相互行為にかぎらず、インターネット上の相互交流やデジタル空間・仮想空間における相互作用をも含めて——が、経済とは別の社会的諸事象——たとえば、宗教、環境保全、セクシュアリティ、アイデンティティ、グローバル化、リスクなど——と関連し合ったり、当事者の意図しない結果として観光とは別の意味をもったりすることに、いいかえれば、観光現象が観光のみには還元できない社会的文化的な広がりをもつその諸局面に、関心を寄せてきたということは指摘できる。さまざまな理論的・方法的選択肢がある中で、社会的行為およびその集積体たる社会現象としての観光を総合的に理解しようとする立場を選択することから、本研究は出発する。これは、これまでの私の研究に一貫する議論の岩盤に当たる点である (吉田 2023a: 9)。

次に、こうした観光の総合的把握を志向する立場に適合的なのは、さまざまな時代や地域・社会における個別具体的な観光諸現象の共通性のみならず差異や多様性にも積極的に目を向け、これを詳細に記述していくという方法である。その場合、マクロな次元も重要であるが、むしろミクロな次元に十分な注意をはらい、ボトムアップの視座から、そうした観光現象を詳述し把握することが望ましい。本研究はこのような民族誌的記述という方法スタイルを採用する。これが第2点である。マックス・ヴェーバーが「価値分析としての意味解釈」などと表現し、クリフォード・ギアツが「厚い記述」と表現した、いわゆる個性記述的な方法を第1点と組み合わせるところに人類学的研究の特徴がある¹ (ヴェーバー 1987(1906): 150, 151, 1998(1904); ギアツ 1987(1973); ブルーナー 2007(2005); 吉田 2005a: 11–65, 2013b: 40–48, 71–111, 2020a: 57–65; Leite, Castañeda & Adams (eds.) 2019; cf. 江口・藤巻 (編) 2011)。ヴェーバーは、歴史的事象の解釈学的な叙述——民族誌の記述のことを指すと考えてよい——を「すべての意義を凌駕する、最高の一意義」とみなした (ヴェーバー 1987(1906): 145)。人類学は、観光研究を本格的に開始する以前から、彼が最高の意義をもつとしたこの叙述という学術的営為を方法的基盤としてきた (吉田 2003)。

ただし、ここで補足しておくべき点がある。民族誌はありのままの素朴な事実を客観的に記述したものと考えるべきではない、という点である。これは、かつてヴェーバーが明確に指摘していた点であり (ヴェーバー 1987(1906): 134, 1998(1904); 吉田 2020a: 44–66)、20世紀後半のポストモダ

¹ 石岡は、こうした「ディティールを描く」「捉える」という点を、「骨組み」を描くにとどまる当時の学術的な調査報告を批判し、直接観察にもとづく「血肉」の記述を重視したマリノフスキに照らして、再確認する (石岡 2023: 21–35; マリノフスキ 2010(1922): 54)。

ン人類学などがあらためて懐疑論的に主題化した点でもある (ex. 岩竹 (編) 1996; クリフォード 2003(1988); クリフォード & マーカス (編) 1996(1986); マーカス & フィッシャー 1989(1986))。さらに、研究倫理の観点からすれば (序言参照)、人類学者は研究対象の人々の認識や理解に寄り添いつつこれを理解しようとするべきでもある。観光論の文脈において述べるならば、観光の当事者は、社会的に構築された特定の価値や意味を内面化したまなざしから対象を捉えている。そして観光の研究者もまた社会的・学術的に構築された特定の価値や意味を内面化したまなざしから対象を捉えている。調査での両者の相互作用は、これらの意味の交差と新たな意味の生成をもたらすこともある。こうした研究活動と研究対象との再帰的な関係性や、広く人々の社会的相互行為が有する再帰的な関係性を踏まえて、民族誌を記述した民族誌的記述を活用すべきである。その方向性を、ヴェーバーは行為の「主観的な」意味の理解というやや単純な枠組みで定式化し (ヴェーバー 1990(1922/1913): 9-18)、シュッツを起点とする現象学派やギアツらは、フッサールの「相互主観性」概念に即してこのヴェーバーの定式化を修正した。ギデンズのいう再帰性や構造化、ブルデュのいうハビトゥス——「構造化する構造…であると同時に構造化された構造」——を含めて、本研究は、さかのぼればヴェーバーから系譜をたどる、こうした相互主観主義の議論枠組みに与する立場に立つ (ギアツ 1987(1973), 1991(1983); ギデンズ 1993(1990): 29-30, 2000(1993/1976): 28-34, 270-276; ギデンズ & サットン 2025(2021/1989): 122-125, 134-138; シュッツ 1980(1970), 1982(1932); ブルデュ 1989(1979): 263; ブルーナー 2007(2005); 吉田 2005a: 11-65, 2013b: 77-78, 2022a(2018): 145-146, 2023a: 9; Mostafanezhad & Swain 2019)。民族誌的記述を志向する方法スタイルは、いわゆる素朴実在論的な客観主義の立場から決別し、一定の理論的背景に支えられるべきである。これが第3点である。

さらに、ヴェーバーの理解社会学やギアツの解釈人類学の立場についても補足しておくべき点がある。すなわち、社会に生きる人々がさまざまな行為を営み、そこに相互主観的な意味を見出した後づけしたりするその背景には、再帰性に加え、主体の行為選択や意味付与選択を拘束し方向づける、フーコーのいう社会的な装置や生権力の支配や、ルーマンのいう潜在的な別様の可能性を考慮に入れる必要がある、という点である² (大澤 2019; 檜垣 (編) 2011; フーコー 1977(1975), 1986(1976), 2006(1994); 三上 2010; ルーマン 2020(1984); Ortner 1994(1984), 2016)。とりわけ複雑化し高度に再帰化した現代社会においては、人々が自ら行為選択をするよう促すメカニズムが強化されている。つまり、現代人は自由に選択し生きることを強いられる社会に生きている／生かされている。それゆえ、現代の観光という行為は、当の主体に内面化されているとともにその背後から主体を突き動かして人を生かす、生権力・生政治の支配構造とともにあるものとして、捉えられねばならない。ギアツやヴェーバーの意味論に、フーコーの生権力論やルーマンの偶有性にもとづく社会理論を総

² 生活圏から離れた場所に赴く——そのひとつに彼岸の「楽園」に癒しをもとめる観光がある——観光行為が現代社会において一定の需要をもつことも、生権力の支配やリスク社会化といった点を背景に理解することができる。現代人は、心身の疲労を回復させたり気分転換をはかったりすることで健康を維持しなければならないというイデオロギーとハビトゥスを内面化するようになった。そして、リクリエーション活動に並々ならぬ関心を向けるようになった。飲酒、賭博、性サービスの享受など、以前から男性をおもな主体として存在した享楽的行為は、かならずしも衰退しているわけではないが、心身の健全さを増進させるという観点からすれば、決して好ましいものではない。むしろ、スポーツ、運動、読書、芸術などが余暇を過ごす趣味の候補としては選好される。こうして、ある程度の経済的・時間的余裕を有する人々を中心に、特定の趣味に時間をかける余暇活動＝消費活動が興隆し、それがさらなるサービス産業の伸長をもたらす円環を形成し、社会の中に浸透していった。ただし、今村がいうように、この余暇の興隆は社会における「労働の全般化」の一環にほかならない。ともあれ、日常生活から離れた場所に移動する観光は、日々の生活のストレスを解放し心身をリフレッシュする、概して肯定的に評価される余暇活動のひとつとなった (今村 2024(1988): 148, 161-169; 吉田 2020a: 93-116, 2023a: 126)。

合させる視野に立つこと、これが第4点である。拙論では、バランディエの「植民地支配」を念頭に、「観光地支配」という概念も提起した（バランディエ 1983(1963); 吉田 2020a: 143–144, 288–300, 2023a: 16, 166–169; cf. 今村 2024(1988)）。

ここまで4つの点を指摘した。まとめておこう。①本研究は、さまざまな理論的・方法的選択肢がある中で、観光を社会的行為として、あるいはそうした行為の集積体たる社会現象として、総合的に捉えようとする立場を選択する。②そうした立場に適合的な方法として、さまざまな時代や地域・社会における個別具体的な観光諸現象がもつ、共通性のみならず差異や多様性にも十分目配りし、もっぱらミクロかつボトムアップの視座からこれを詳述する方法がある。③この民族誌的記述を志向するスタイルは、一定の理論的背景に支えられるべきものである。社会そして研究活動が有する再帰性に鑑みれば、研究対象を素朴実在論的に定位する客観主義の立場から決別する必要がある。④複雑性と再帰性とを高めている現代の観光を捕捉する上では、ギアツやヴェーバーらの意味解釈論に、フーコーの権力論やルーマンの社会理論などを総合させる視野に立つべきである。これらの中で、①②は方法上の留意点、③④は理論上の留意点と整理できる。これら4点の詳細については、既刊の拙論の議論に譲る（吉田 2005a, 2013b, 2020a, 2021b, 2022a(2018), 2023a）。

以上、人類学的な観光研究であることを標榜する本研究の理論的・方法的枠組みの基盤を4点にまとめた。ここで1点を補足しておく。当初、私はギアツやヴェーバーを参照し、おもに①②③を基盤とし、そこに④の再帰性や支配のメカニズムにも目配りする理論的・方法的枠組みを「解釈学的認識」と呼んでいた（吉田 2005a, 2013b, 2020a）。しかし、宗教研究から観光研究へと軸足を移し、④をより重視するようになる中で、「解釈学」というラベルの使用が④の論点とかならずしも折り合わない可能性があることに気づくようになった。解釈学は、当事者にとっての相互主観的な意味の理解とその記述を一義的あるいは必要十分な主題とみなす立場といえるが、④は当事者にならずとも意識されない、いわばメタレベルのメカニズムの解明に関わるからである。そこで、本研究では①～④からなる基盤的立脚点を「人類学的研究」と呼ぶことにした。

では、次に節をかえて、「周縁観光論」の含意について説明することにしよう。

第2節 楽園観光論から周縁観光論へ

本節では、『周縁観光論』（吉田 2023a）の序章・結章の主要論点をあらためて整理しつつ、「周縁観光論」という主題設定が意味するところを明確にする。その場合、「周縁観光論」の前段階にあった「楽園観光論」という主題設定から説き起こすことにしたい。

前節で整理した①～④を基盤とする、つまり、観光を社会的行為あるいはその集積体たる社会現象とみなして総合的に捉えようとする立場に立ち、さまざまな時代や地域・社会における観光現象の差異や多様性をミクロかつボトムアップの視座から詳述する、そしてそこに社会や研究活動が有する再帰性や支配の存在などに着目する理論的関心を組み込む、という理論的・方法的枠組みに立った場合、具体的な研究対象や主題をどのように設定できるであろうか。さまざまな選択肢はあるであろうが、私は、それまで自身がフィールドとしていたインドネシアのバリや日本の奄美・沖縄といった、質量ともに豊かなデータの蓄積がある島嶼地域を研究対象に設定し、これらの地域で展開されているひとつのユニークな観光のあり方を「楽園観光」という理念型で捉え、この観光形態とこれらの観光地が有する特徴やメカニズムを、各地がたどった社会的歴史的過程および現状を整理した民族誌的記述と理論研究とを組み合わせ考察する、という作業に取り組んだ。これが、ここで楽園観光論と呼ぶものである（吉田 2013b, 2016a, 2020a）。

楽園観光は、観光者の日常生活から乖離した「楽園」というイメージに合致する諸要素——青い海と空、白い波と砂、サンゴ礁、ヤシの木、鮮やかな花々、素朴な人々の生活が織り込まれたのどかな風景、彼らの伝統文化や芸術など——に囲まれた癒しのひとときを、ホスト側が観光者に提供することによって成り立っている。この楽園観光が成立する場所つまり楽園観光地は、おもに熱帯・亜熱帯の小規模島嶼やその一部をその主要な舞台としている。大半の楽園観光地は、ここを訪れる観光者のホームの地から遠く離れた世界の周縁の地に点在すると同時に、当該観光地を部分社会として包摂する国などの社会単位を中心地からも一定程度離れている。つまり、楽園観光地は一般に、観光者の生活圏からの彼岸性と現地社会における地政学的な周縁性とを特徴とする。加えて、小規模島嶼にある楽園観光地は、生態学的・社会経済学的な脆弱性をも抱えている。ここで着目すべきは、こうした地政学的周縁性と生態学的・社会経済学的脆弱性とを抱えた小規模な楽園観光地において小規模ビジネスに携わる現地の人々である (Dahles & Bras (eds.) 1999; cf. 市野澤 2023)。これといった有力な地場産業のない楽園観光地は、通常外部資本によって開発される。そもそも観光者自体、外からやって来る存在である。ひとときのブームが去って観光者が来なくなれば、外部企業の進出・撤退の如何にかかわらず、観光で生計を立てる小規模経営者たちは困窮せざるをえない。生まれ育ったその地を離れることができない人々にとって、当該楽園観光地の衰退は彼らの生活基盤に直結する。とりわけ、観光依存体質を——社会的・経済的のみならず文化的・精神的にも——深めた社会に生きるそのような人々に注目すれば、楽園観光地がもつ脆弱性・高リスク性はいっそう明らかである。

そもそも、楽園観光地は、「楽園」イメージを切り売りすることで成り立っており、その土地に固有な観光資源の実質はかならずしも重要ではない、という独特の特徴をもつ。観光者は、ハワイにあるようなものをもとめて、グアムやバリや沖縄を訪れる。それぞれの楽園観光地の実態的な差異はわずかなものであってよく、過度の差別化や独自性の強調は楽園観光地としての魅力と相容れない場合すらある。楽園観光地は、複製技術革命後に広範に流通するようになった、同質のシミュラクルからなるイメージや記号にもとづき成立している。だからこそ、楽園観光地は世界の各地に点々と増殖することができ、観光市場において独自の存在意義をもつものともなりえたのである。ただし、そのことは、楽園観光地が競合関係にある他の観光地に勝つ決め手をもちえないということの意味する。楽園観光の中心にあるものは、複製されるイメージと記号であって、実質という点では空虚といってよい。この中心の実質の空虚は、楽園観光地および楽園観光の際立った特徴である。私は、こうした点を基軸に、バリや奄美・沖縄を主たる民族誌的事例とし、これらの楽園観光地の有する構造的特徴および社会的歴史的過程——ヴェーバーのいう「合理化」の過程（第1章第3節）——について考察した（吉田 2013b, 2016a, 2016b, 2020a, 2021b, 2023a; cf. 大塚英 2025: 36–40; ペンヤミン 1995(1936/1935); ボードリヤール 1984(1981), 1995(1970); マキアーネル 2012(1999/1976)）。

さて、この楽園観光研究とその延長線上にある楽園観光地の観光宗教研究をまとめたのち（吉田 2013b, 2020a）、私は、そのような自身の研究が、②の観光現象の差異や多様性の把握という点においてかならずしも十分なものではないのではないか、と考えるようになった。当該の研究は、楽園観光と楽園観光地が有する核心的な特徴やメカニズムを捉えようとするものであった。しかし、楽園観光の実相やそれぞれの観光地が有する固有性を理解する上で差異や多様性を重視するのであれば、必要なのは、そうした核心にある共通の特徴よりも、「周縁」や「裾野」あるいは「先端」に何があるのかを把握することではないか、ということに気づいたのである。こうして、私は、楽園観光研究のさらなる進展にかなう作業として、その議論枠組みの解体・再構築を模索するように

なった。

先行研究を一瞥しても、観光について論じた研究のほとんどは、理論的考究を主題としたものであれ、民族誌的記述を主題としたものであれ、観光一般や個別具体的な観光現象における「中心」的な特徴やメカニズムを探究するものであったといえる。私の楽園観光論もまさにそうであった。しかし、複雑化し差異化し再帰性を高め液状化する現代においては (ex. バウマン 2001 (2000), 2008 (2005), 2012 (2006); ベック 1998 (1986), 2003 (2002+1997), 2014 (1999/1993); ベック・ギデンズ&ラッシュ 1997 (1994); ルーマン 2014 (1991))、観光そして観光地社会もまた、複雑化し差異化し再帰性を高め液状化していると考えてよい。であれば、そうした中心的なものを探る目論見自体はひとつの妥当な選択肢であるとしても、時代の変化や地域・社会による差異により焦点を当てた民族誌的記述が展開されてしかるべきであり、また当の特徴やメカニズムの中心性自体が変質する可能性を視野に収めるべきである。また、社会の複雑化・差異化・再帰化・液状化が観光のあり方に影響を与える可能性があると考えるのであれば、そうした社会の複雑化・差異化・再帰化・液状化が観光研究のパラダイムにも影響を与える可能性を排除することはできないはずである。たとえば、観光現象と観光研究との間の再帰的關係性の高まりの如何やその具体的局面を、観光研究は議論の俎上に載せるべきであるが、そうした再帰的な観光研究がこれまで十分展開されてきたとはいえない (アーリ 2003 (1995): x-xi; 遠藤 2014, 2017: 133-134, 2018: 231; 門田 2013: 30-40; 須藤 2010: 18, 2012: 161; 吉田 2013b, 2020a: 103)。さらに、そもそも中心に何があるのかを探究するという議論枠組みからは見えてこないものもあるかもしれない。このように考えるならば、先行研究においては試みられていない、中心とは逆に周縁に目を向ける観光研究もあってよいのではないか。

このようにして、私は、現代観光の「中心」を捉えようとする先行研究に支配的な視座にたいし、「周縁」「裾野」「先端」を捉えようとするオルタナティブな議論可能性の探究を、楽園観光論の次の主題に掲げた。これが周縁観光論である。この「周縁」には複合的な含意がある。ここでは、それを計5点に整理しておく。

第1点は、いま述べたように、この現代観光の周縁の探究という試みが、楽園観光・楽園観光地のもつ周縁性の把握を基盤にしている点である。楽園観光地は、地政学的・社会経済的・生態学的など、多重の意味での周縁性を有する場所である。そして、それが観光地としての多重の脆弱性・高リスク性に直結している。とりわけ現地に在住し小規模な観光ビジネスに従事する人々において、楽園観光地のもつ高リスク性はときに剥き出しのかたちで顕在化する。そもそも、イメージや記号にもとづく楽園観光地は、類似する実体の生産・複製には効率的・合理的であろうが、他との差別化に原理的な困難を抱えている点で、顧客つまり観光者にその魅力をアピールすべき商品としては本質的な脆弱性や非合理性を抱えている。世界の周縁の地に点在する楽園観光地、その地が有する社会的・経済的・生態学的な脆弱性、商品としての脆弱性・非合理性といった点は、楽園観光・楽園観光地の核心的特徴であるとともに、こうした観光形態や観光地とそこに生きる現地の人々を周縁的なポジショナリティにとどめ、周縁化しつづける、原理ないしメカニズムでもある (cf. 波名城 2025)。ローカルな生活圏の中にとどまる人々は、たがいにグローバルに連携し合うことも難しい (小山・笹島・白石・田井中・古川 2025: 3; 長谷川・浜・藤村・町村 2019: 466; 吉田 2021b: 29-30)。楽園観光の核心的特徴を、周縁性をもたらす／周縁化する原理へと読み替えるところ、楽園観光論から周縁観光論への転換の起点である。

ところで、こうした周縁性は楽園観光・楽園観光地にかざられるのであろうか。先に、楽園観光の中心にあるのは複製されるイメージと記号であると述べた。この中心の実質の空虚は、楽園観光地だけが有する特徴であらうか。否である。むしろ、おおかれすくなかれ現代の観光地のおおくが

一般にもつ特徴であると考えてよい。たとえば、日本における「小京都」観光地は、それを如実に示す例である。1985年5月に小京都と呼ばれる26市町と京都が結成した「全国京都会議」は、2025年4月現在で37の市町からなる。その加盟の基準は、①京都に似た自然景観、町並み、たたずまいがある、②京都と歴史的なつながりがある、③伝統的な産業、芸能がある、という3つの条件のうち、ひとつ以上が当てはまることである (<https://shokyoto.jp/ml/ja/top/>)。この基準とりわけ条件③をみれば、小京都の「京都」性がひとつの記号であることは明白である。また、コンテンツツーリズムも、社会に広範に流通するイメージや記号を基盤とし、これを消費者にアピールすることで成り立つ観光形態のひとつである。現代の情報社会化の中で、イメージを中心とするタイプの観光地および観光形態が占める比重はますます増しているように思われる。現代観光は、複雑化し差異化の度合いを高めつつも、その一方で、記号の充溢と実質の空虚という特徴を、それゆえ差別化の困難・脆弱性・高リスク性といった点をも、強化していると考えられる(江口 1998; 江口・藤巻(編) 2010; 岡本健(編) 2019; 岡本亮 2015; 小新井 2026; 竹沢 2022a, 2022b; 橋本・佐藤(編) 2003; ベック 1998(1986), 2003(2002+1997), 2017(2016); ベック & エリーザベト・ベック 2014(2011); 増淵 2010; リッツァ 2005(2004), 2009(2005/1999); Çakmak, Tucker & Hollinshead 2021b)。

ラッシュとアーリは、現代観光のこうした特徴を1990年代に先取りし論じていた。20世紀後半に記号の増殖と内容の空白化はいっそう顕著になり、観光者はこれをさらに消費するようになった、現代社会ではあらゆる場所のシミュラクルが生産可能となり、また実際に生産され、そうしてつくり出された場所のシミュラクルのフローが観光の局面だけでなく日常生活にも浸透している、というのである(ラッシュ&アーリ 2018(1994): 13-15, 239, 250, 289)。もちろん、現代観光の中には実質的な内容を中心据えたタイプのものもある。たとえば世界遺産観光である。ただ、そうした中心の実質を顧客にアピールする観光地も、シミュラクルのフローと無縁ではありえない。オリジナルなものをもとめるその志向性は、メディアが流布する当の実質——たとえばルーヴル美術館の「モナ・リザ」、屋久島の縄文杉、広島の実験ドームなど——の複製情報(写真や文字)を通して消費者たる観光者に植え込まれたものであるからである(cf. プーアスティン 1964(1962))。現代の情報社会において(吉田 2020a: 94-95)、そうしたシミュラクルから遮断されたところで営まれる観光はもはや考えられない。とすれば、こと現代観光に関しては、観光の中心にあるはずの何らかの実質を探究することは決して自明視される主題設定ではないといえる。この現代観光に広がる中心の実質の空虚への着目が、第2点である。

今日、情報社会化とくにデジタル化(第Ⅲ章第2節)をひとつの背景に、新たな観光商品が次々と市場に投入されるようになっている。そのひとつが、コロナ禍において一段と革新が進んだヴァーチャルツーリズム関連のコンテンツである(ex. 松本 2021; 圓田 2022; 渡部 2021)。既存の施設や景観にイルミネーションやプロジェクションマッピングを施し、新たな需要を喚起する方法も、各地で採用されている。一部の富裕層や冒険家が実践する深海観光や宇宙観光——極限観光(extreme tourism)ともいわれる——は、先端技術に依拠した先端的観光といえる。わけても宇宙観光は、最新の情報技術とその他の技術の粋を集めた現代の最先端の観光形態といえる。これらの観光商品の価値の浸透も、記号の増殖に支えられている。

そうした中で注目されるのは、複雑化し裾野を広げた現代観光の中に、たがいに対照的であったり相容れないコンセプトにもとづいていたりする観光形態が同居している、という点である。若干の例を挙げよう。屋久島の縄文杉に向かうトレッキングでは、ごみはすべて持ち帰り、排泄は持参の携行トイレで済ますことになる。こうした環境への配慮を肯定的に捉え魅力を感じて参加する観光者がいる一方、排泄まで拘束されることには違和感を覚え、この種の観光には魅力を感じない観

光者もいる。「エコツアー」を銘打つ観光商品の中には、かなり高額ではあるが非営利団体が催行し環境に十分配慮した学習効果の高いものもあれば、比較的安価ではあるが営利追求型であって、本来のルールを無視して環境にダメージを与える客の体験行為に目をつぶるものもある。アグリツーリズムなどの生産志向の観光と、爆買い観光や食べ尽くし観光などの消費ないし乱費志向の観光とを、ともに好んで実践する者もいれば、どちらか一方にしか関心がないという者もいる。あるいは、余暇と労働が溶け合うワーケーションや、旅行と移住が溶け合うライフスタイル移住などを実践する者もいれば（今里 2025; 澤 2025; Benson 2014(2011); Benson & O'Reilly (eds.) 2016(2009); Benson & Osbaldiston (eds.) 2014; Janoschka & Haas (eds.) 2017(2014))、観光を日常生活からの切断や解放として捉え、非日常としての観光という余暇活動を渴望する者もいる。ホームの近場にある海浜で1泊2日の質素な旅行を楽しんだその次に、南太平洋のゴージャスなホテルでのんびり過ごすグローバルな楽園観光を楽しむ者もいれば、近場の海水浴場しか行けない者、比較的安価なプランの旅行しか実践しえない者もいる。先に触れた宇宙観光を含め、現代にはさまざまな観光形態があるが、実際に観光者がそのどれを実践する／できるかは、財力・時間・嗜好・好奇心によりさまざまである。より正確に言えば、嗜好や価値観に関わる水平的な差異と経済力や社会格差という垂直的な差異が交差する中で、観光者は多様な観光形態の中のどれかを選択肢から排除し——あるいは排除せざるをえず——、どれかを選択して実践している。その選択は、観光者側のみならず、それら諸観光形態を提供する事業者つまりホスト側にもある。

こうした状況において重要なのは、単に現代観光の総体を俯瞰してその多様化・複雑化を見て取ることではなく、一部たがいに相容れないものも含む観光諸形態が並立・並走する中で、それぞれの観光主体——本研究では、ホスト、ゲスト、ミドルマン、それらの特徴をあわせつつアノマリー的主体などを包摂する概念として「観光主体」の語を使用する——にとって、どの観光形態や実践が接近可能であり、どれが接近不可能なのかを、ミクロな視点からつぶさに描き出すことである。そのためには、おおくの消費者に訴求するよう設計されている観光形態、すなわち大衆志向型の観光形態よりも、一部の観光主体に標的を絞って訴求する、マイナーで「尖った」観光形態、あるいは観光と観光でないものとの境に位置するような観光形態——ワーケーションやライフスタイル移住などはその例である——に、着目する必要がある。それは、現代観光の「周縁」的な諸形態にアプローチすることを意味しよう。これが第3点である。

さらに、そうした周縁的な観光諸形態にアプローチする場合、その担い手となる観光主体の間の差異やそのポジショナリティを十分踏まえる必要がある。とりわけ、観光実践のまったき主体とはいえないようなマージナルな観光主体にまで目配りすべきである。たとえば、観光者の中には、自身が思うような観光を存分に享受しうる人々もいれば、そうではない人々もいる。観光事業者の中にも、観光で繁栄する中心地で事業を順調に営む者もいれば、その周縁地域でゼロから起業し試行錯誤する者もいる。観光で成功する事業者もいれば、成功を目指したがうまくいかない者もいる。また、観光の中心地と周縁地域、事業の成功と行き詰まりは、時間の経過や時代の変化とともに変わりうる。こうした人々の間にある差異とその時系列的な変化を、後者の周縁的な主体や地域の方により注目しながら明確にする民族誌的記述とその考察を、いくつかのトピックに焦点を当てながら積み重ねること、これが周縁観光論の具体的な議論戦略となる。これまでの観光研究は、ホスト側、ゲスト側双方におけるこうした周縁的な観光主体に焦点を当ててこなかった。それは、観光の「中心」の解明を目指すパラダイムの内部にあっては当然ともいえる。しかし、水平的にも垂直的にも観光主体が分化する様相を示し、さまざまな観光形態が複雑かつ多様に存立し、部分的には相反する状況をも示すようになった現状にあっては、周縁的な観光主体と観光形態に着目した研究

は、試行するに値する議論方向性ではないかと考えられる。

観光研究は、その出発点から、観光を経済的にゆとりある者が実践するある種の奢侈的行為として捉える傾向があった。人類学においても、たとえばスミスの観光の定義——「観光＝余暇時間＋自由裁量所得＋肯定的な地元の承認」という等式で表現される——には、そうした傾向を看取することができる（スミス 2018b(1989/1977): 1; 吉田 2023a: 36–37, 43–51）。しかし、観光が社会に広く浸透している現在、もはや観光がゆとりある社会層の実践とばかりいえないことは明らかである。消費社会の中に生きる人々の多様なライフスタイルの中に、観光として捉えられる行為が占める優先性やその振れ幅を、あらためてしっかり捉え直すことが必要である（cf. 倉敷 2013; 西澤 2019: 17–19, 47; 藤村 2013: 81–87）。とりわけ、アイデンティティの再確認や表出の主要な手段として、多少の生活費を切り詰めても観光を実践する、あるいは実践したいと欲する人々の動向や、彼ら自身のライフサイクルないしライフコースの中でのそのポジショナリティの変化を、微視的かつ多角的な視線から探究する必要がある。そうした主体のあり方の差異や変化は、消費者たる観光者の側だけでなく観光事業者の側においても、留意されなくてはならない。さらに、世界には観光という余暇活動に参画できない人々が大多数であるという地域もすくなくない。観光者にめったになれない「周縁」に位置する人々や、観光体験からほとんど排除されているに等しい、「外縁」との境界に位置する人々、そして観光事業による利潤の追求や生きがいの獲得をもとめながらもそれを十分得られない「周縁」に位置する人々や、自らが望むような観光実践から疎外された状況に在るに等しい、「外縁」との境界に位置する事業者らを視野に収める必要がある。この点で、先行研究はいわば中心に位置するホストとゲストに傾いた議論を生産してきたといつてよい（吉田 2022b, 2023a）。必要なのは、ゲストとホスト双方を含めた周縁や外縁に位置する観光諸主体に目を向け、観光現象の周縁・裾野・先端の局所のあり方を議論の俎上に載せることである。これが第4点である。

ただし、そうした作業にはおよそ終点や到達点がない。現代観光の周縁にある諸現象を包括的あるいは網羅的に主題に載せることは、もとより断念せざるをえない。それゆえ、その種の研究がなされるのは、多様な観光諸形態の総体を念頭におきつつ、さしあたりそのいくつかの局面に照準を当てて検討する、ある種のゲリラ戦を限定的に実行することにとどまる。これが第5点である。この点は、中心ではなく周縁に主題を設定することの代償であると考えざるをえない。

大衆観光は、現状においてはなお観光の「中心」に君臨する観光形態であるといえる。すくなくとも、2020年代の現在、旅行会社が提示するパッケージ型の観光形態が廃れたと結論づけることはできない。ただ、一方で、現代観光は、この中心にある形態とは異なる、あるいはこれと相反するものも含む、多様な観光形態の総体から成り立っている。現代の観光現象は、グローバル化やグローバル化の下での観光産業・事業の拡大・増殖、たがいに相反するものをも含む観光商品の共存・競合という多様性・複雑性の増大、そうした多様な観光形態を実践する人々の意識や価値観の多様化や変容、社会的格差や貧困の拡大ないし顕在化、などが混然一体となった状況の下に展開している。そして、いわば十全なホストやゲストとして観光実践に携わる人々の周縁には、これに不十分にしか携われない人々がおり、そのさらに外縁には観光実践にほとんど関与できない人々がいる。そうした観光と観光主体の多様で拡散したあり方を、この裾野や周縁そして外縁との境界に注目し、局所のあり方の記述と考察をひとつひとつ積み重ねながら捉える研究が、周縁観光論である。

以上をまとめよう。周縁観光論は、(1)世界の周縁のまた周縁の地に展開した楽園観光の核心的特徴を周縁化へのメカニズムと読み替えることを起点にし、(2)現代の観光がイメージと記号の流通に駆動され、中心の実質の空虚という特徴を広く有する点に着目し、(3)たがいに相反する観光形態をも一部に内包しながら複雑性を増大させる中にある、周縁的な諸現象に照準を合わせ、(4)観光とい

う消費行為やなりわいの実践に十分与ることのできない、いわば観光実践の外縁との境界に立っている／立たされている観光実践主体の存在形態に留意し、(5)多方面にわたる局所的なグリラ戦をそうした周縁の前線において戦うかのような戦術を採りつつ、現代観光の具体的なあり方を記述的に明らかにしようとする。本研究は、こうした意味での周縁観光論を、前著『周縁観光論』につづき展開しようとする。

『周縁観光論』では、序章においてこうした周縁観光論の目論見を明確化したのち、まず第Ⅰ章で「観光」概念の定義をめぐる理論的考察を行い、観光の核心を定義によって明確化しようとした主要な先行研究を批判的に再検討しながら、周縁の探究という試みが有する理論・方法上のバックグラウンドを明確にしようとした。そして、第Ⅱ章以下では具体的な民族誌的事実の検討に向かった。第Ⅱ章では、奄美・沖縄の世界自然遺産観光を事例とし、観光地の内と外の境界をめぐる、第Ⅲ章では、ひめゆり同窓会によるひめゆり平和祈念資料館の設立・運営を事例とし、観光の外にあるべき「霊域」の観光資源化をめぐる、第Ⅳ章では、インドネシアのバリ島中部の観光地ウブド (Ubud) に中長期滞在する／した日本人移住者を事例とし、ホストとゲストといった概念によっては明確に捉えることができないような周縁的な観光主体のあり方をめぐって、民族誌的記述にもとづく検討をそれぞれ行い、結章では、第Ⅳ章の議論を受けながら、観光に十分関与できない主体を「観光サバルタン」という概念で捉え直す可能性について論じた。

先行研究においては、ホストとゲスト、これらを媒介するミドルマンが、観光主体を捉える支配的概念であった (ex. スミス (編) 2018a(1989/1977); Smith & Brent (eds.) 2001)。しかし、現代人のホームとアウェイの境界は液状化しており、ホームを出発してアウェイの地に向かうゲストと、そうしたゲストを自身のホームで迎え入れるホストという理解枠組みの有効性は、薄らいでいると考えざるをえない。現代社会の複雑化・差異化・再帰化・液状化を背景に、あらためて周縁から現代観光のあり方を捉えつつ記述的に理解した結果、暫定的な結論として、ホストとゲストの相互転換性や両者を分かち境界の可塑性・流動性と、観光者・事業者ともに巻き込まれうる観光の高リスク性や支配のメカニズムにこそ目を向けねばならない、と考えられた。観光サバルタンは、ホストとゲスト (とミドルマン) に代わる、現代観光の担い手たる主体を捉えるためのオルタナティブな理念型である。こうして、『周縁観光論』は、グラムシのいうモノグラフや史誌 (storiografia) つまりは民族誌の記述のさらなる蓄積こそもっとも肝要であることをあらためて確認しつつ、グラムシによる考究から若干の跳躍を試みて、観光サバルタンが関わる周縁的現象の探究——より適切な表現をすれば、諸観光サバルタンが実践する周縁的観光現象の理論的かつ民族誌的探究——の方向性を示したところで、いったん議論を締めることにした (吉田 2023a, 2023b; cf. 市野澤 2026; 楠見 2024: 108–119; 鈴木富 2011; 鈴木涼 2026; 吉田 2016a, 2020a, 2022b; Adams 2019; Buttigieg 2011 (1992); Crehan 2016; Gramsci 2011a (1992), 2011b (1996), 2011c (2007), 2021 (1975/1934–1935); Green 2011 (2002); Hoare & Sperber 2016)。

第3節 周縁論からパラドクス論へ

私は、『周縁観光論』によって、現代観光研究の新たな方向性の端緒を示すことはある程度できたと考えていた。しかし、さほどときをおかず、上記の周縁観光論の議論枠組みにたいしてある種のひっかかりと別様の議論の可能性やその必要性を感じるようになった。

現代観光の中心ではなく周縁的事象に照準を当てる、その際、「観光」を実体の次元で明確に定

義できるとする立場には立たず、これに代わる理論的・方法的立場を採用する³、そして差異や格差が折り重なる現代観光の複雑性の中に生きる観光主体のサバルタン性に着目しつつ、ゲリラ戦的な民族誌的研究を重ねていく、という議論スタイルは、現代観光を論じる上での適合的な手法であるという感覚はあった。ただ、観光サバルタンに着目するのとはまた別の角度から、現代観光の周縁的事象を考察する余地もまたありうるように思われた⁴。『周縁観光論』の結章で述べた「観光研究の「観光」化」のために、あらためて「周縁」が何であるかを再考することから周縁観光論の新たな展開を模索すること、これが本研究『周縁観光論Ⅱ』の起点になった。

ひっかかりを感じたおもなポイントは2つある。ひとつは、中心と周縁はどこでどのように区別できるのかである。『周縁観光論』では、何らかの明確な境界線で中心と周縁を分けることはできないと考えていたが、観光現象や観光主体がおかれている社会的ポジショナリティを念頭におき、「周縁」を空間的なメタファーにもっぱら依拠して捉え、観光サバルタンという周縁的で脆弱な観光主体や彼らの関わる観光現象をおもな考察の対象に据えることにした。ただ、中心と周縁の関係性は、かならずしもそうした空間的な布置における差異に還元できず、また、その差異は固定的・安定的なものではなく動的なもの、あるいはむしろ不確定的なもの、と考えられた。この点は、『周縁観光論』の序章や結章でも触れていた。中心的ポジションにいる観光主体と周縁的なポジションにいる観光主体との境界はあいまいであり、前者から後者へまた後者から前者へと時間経過に伴って立場は変わりうる。また、「観光地支配」のメカニズムに従属しこれに拘束されているのは、周縁的なポジションにいる主体だけではない。観光事業の成功者や、世界中の観光地を飛び回って余暇を享受する裕福な観光者も、その支配のメカニズムに従属し耽溺しこれに拘束されているれば、観光サバルタンとして捉えうる（吉田 2023a: 24-26, 167-169）。ただ、そうであれば、逆に周縁的なポジションにいる観光主体に中心的ポジショナリティを看取することもありうるかもしれない。となると、視点によって中心と周縁は反転しうることになる。となると、では、中心と周縁はいったいどう区別できるのか。仮にこの2つを論理的に突き詰めた場合に明確には区別できないのなら、中心との相対的な位置関係を念頭に設定した「周縁」概念を抜本的に再検討する——場合によっては「捨てる」(unlearn)——必要がある（第Ⅰ章脚注16）。このように、『周縁観光論』では周縁と中心との関係性が考究できないままにおかれていた。ただ、この残された宿題への回答は、手持ちの理論的方法的枠組みによっては難しいように思われた。

もうひとつは、現代観光の「先端」についてである。『周縁観光論』では、周縁・先端・裾野をひと括りにし、これを中心と外縁の間に設定していた。しかし、現代観光の「先端」に位置する観光形態や観光主体は、周縁的で脆弱であるとはいいい切れず、逆に「中心」の性格を色濃くもつこともある。たとえば、21世紀の最先端にある観光形態のひとつ宇宙観光を実践しうる観光者は、高価な費用の支払い能力という点で、世界のごくかぎられた、中心あるいは頂点に位置する消費者に

3 『周縁観光論』は、第Ⅰ章で「観光」概念を具体的かつ一意的な定義へと集約することが困難であることを論じることから議論を出発させた（吉田 2023a）。ただし、この語をまったく使用せずに議論を行うこともまた困難であるため、言語ゲーム論を参照し、日常的な語用を念頭においたかたちで、この語をもちいることにした（ヴィトゲンシュタイン 2013(2003/1953); クリプキ 1985(1983/1982); 野矢 2013, 2022）。本研究もこうした視点を引き継いでいる。付言すると、私は、切り口は異なるがほぼ同様の観点からバリの「宗教」を論じたこともある（吉田 2005a）。また、「反科学の観光論」あるいは圧縮して「反観光論」と呼んだ拙論の立場も、こうした観点と連関する（吉田 2013b）。それぞれの拙書の主題は、「宗教」や「観光」といった概念の脱ブラックボックス化ないし脱構築・再構築の追究にあったと総括できる。

4 『周縁観光論』では、周縁という概念を研究対象たる観光主体や観光形態にもちいることが当の主体や形態を周縁化することに再帰的・結果的につながる可能性があるという問題に、十分対峙できていなかった。この点も、観光サバルタンの探究をさらに展開するのとは別の方向性において周縁観光論の可能性を模索しようと考えた、ひとつの背景である。

ほかならない。宇宙観光を推進する事業者も、イーロン・マスクに代表されるように、IT や宇宙産業を含む有力産業の中心的担い手である（第Ⅲ章）。むろん彼らにサバルタンとしての性格を看取しうる可能性はあるが、すくなくとも先端がつねに周縁であると考えるべきではないであろう。『周縁観光論』では、先端の事例考察が抜けていた。先端に当たる具体例を取り上げて「周縁」の民族誌的考察を補完する追加の作業が必要である、と考えられた。

前節でも述べたように、現代観光は、その一部に相容れない要素を抱えた複雑な多様体である。その複雑性に鑑みれば、中心と周縁を対立的に捉え、周縁・先端・裾野をひと括りに捉える空間的なメタファーはあまりに単純であった。やや乱暴な物言いをすれば、中心が即周縁であったり周縁が即中心であったりするような現代観光の複雑性を捉えること、あるいは、中心と周縁との区別が無効化したり反転したりするような局面をも視野に収める理論的・民族誌的検討を上積みすること、そしてそこに先端に関する事例考察を加えることが、なすべき作業として視野に浮上した。遅まきながら、私は、『周縁観光論』刊行後に「周縁」をめぐる考察の不徹底さについて言語化できるようになったのである。その場合、『周縁観光論』の議論枠組みの延長線上に議論を足し算すれば十分ということではないように思われた。その議論枠組みの起点に立ち戻って点検し、新たな角度から議論を再出発させるための方法や理論の導入が不可欠である、と考えられた。

中心が即周縁であったり周縁が即中心であったりするというのは、これらの概念の厳密な定義を前提とする立場からみれば、論理的に矛盾した物言い以外の何ものでもないであろう。しかし、その一見したところの矛盾つまりはパラドクスを、解消すべき難題としてではなく、正面から向かい合うべき課題ないし主題として受け止め、これを生産的に論じうる議論枠組みを導入できれば、いま述べたような、中心と周縁の境界設定不能性や反転可能性、先端たる周縁の中心可能性、中心即周縁・周縁即中心の動態性や不確定性といった、稚拙な表現で語ろうとした現代観光がもちうる特徴を、論理的に透明化しつつ、民族誌的事実に照らしながら記述し考察できるのではないか、そしてこれを人類学的研究のスタイルに乗せることができるのではないか。私は、中心と周縁の関係性を、空間的なメタファーで語るにとどまった『周縁観光論』に代わる、脱空間論的な角度から語る方途を、パラドクス論の導入という方向性で検討するようになった。観光の中心と周縁とを分かť境界の設定の困難さは、AであることとAでないこととの区別の困難さと、ある意味で同等であると考えることができる（cf. 大澤 1992; スペンサー＝ブラウン 1987(1969); ボルフ 2014(2011): 115–124; リーチ 1981(1976)）。また、中心即周縁・周縁即中心は、「ねじれによって内側が外側になり外側が内側になる、トポロジー図形のメビウスの輪に似て…真が偽となり偽が真となる」とプリーストが表現する（プリースト 2019(2017/2000): 37）、自己言及的パラドクスの特徴にまさに重なる（第Ⅰ章第Ⅱ節参照）。私は、こうしたパラドクス論を参照する人類学的パラドクス論を議論枠組みとし、これを民族誌的記述と組み合わせた周縁観光論のオルタナティブを探究すべく、新たな議論方向性を模索しはじめた。

以上、パラドクス論導入に至る経緯やそこにある問題の所在について述べた。この人類学的パラドクス論については、第Ⅰ章であらためて論じる。本来であれば、この節の中で、パラドクスとは何か、先に言及した「パラドクス」と「矛盾」はいかなる関係にあるのか、などを明確にしつつ、人類学的パラドクス論について明らかにすべきところではある。しかし、パラドクスやこれに関連ないし類似する概念——矛盾、逆説、アンチノミー、そして疑似パラドクスなど——の整理は、そう簡単な作業ではない。哲学等の議論を踏まえ、一定の前提を確認した上で慎重に論じる必要があるからである。それを、問題の所在と研究主題について論じることを目的としたこの序章に挿入することは、あまりに議論を複雑化しすぎると判断した。そこで、それら概念の整理と人類学的パラ

ドクス論という議論枠組みの設定は、第Ⅰ章で仕切り直して取り組むことにする。

ひとつ付言する。私は、パラドクスへの理論的関心を、『周縁観光論』に取り組む前からもっていた。具体的には、ルーマンの社会システム理論やヴェーバーの合理化論をバリ宗教論・楽園観光論・観光宗教論に取り込む際に、「パラドクスの脱パラドクス化」や「合理化のパラドクス」という論点に着目していた（吉田 2005a, 2013b, 2018, 2020a）。パラドクスに正面から向かい合い、これを生産的に論じうる議論枠組みを追究しうるのではないかという見通しは、彼らの議論から漠然と得ていたものである。ただし、これまでの私は、パラドクスがそもそも何であるかを省察しないまま、社会学的研究の成果の援用可能性を思案していたにすぎない。本研究は、バリ宗教論にはじまる私の人類学的研究の当初から内に宿していたパラドクスへの関心に正面から向かい合い、これを起点に周縁観光論の新展開をはかろうとする試論でもある。

本節のポイントを4点にまとめておこう。①『周縁観光論』では、「周縁」を空間的なメタファーに依拠して捉え、観光サバルタンという周縁的で脆弱な観光主体や、彼らの関わる観光現象をおもな考察の対象に据えた。それはひとつの議論選択であったが、これとはまた別の角度から、現代観光の「周縁」についてあらためて考察を行う余地もあると考えられた。②具体的な論点は2つある。ひとつは、中心と周縁の区別である。中心的ポジションにいる観光主体と周縁的なポジションにいる観光主体との境界はあいまいであり、両者は時間の経過に伴って変化し、あるいは視点によって変わりうる。とすれば、中心と周縁は概念上いかに区別できるのか。もしこの2つが区別できないとすれば、中心との相対的な位置関係で設定した「周縁」概念について、あらためて抜本的に再検討する必要がある。③いまひとつは、周縁・先端・裾野をひと括りに捉えることの是非である。とくに『周縁観光論』では現代観光の「先端」の考察が欠けていた。現代観光の先端に位置する観光形態や観光主体は、かならずしも周縁的で脆弱であるとはかぎらない。先端に関する民族誌的事例を議論の俎上に載せ、「周縁」の別様の実態を再検討する追加の作業が必要である。④この②の論点は、中心即周縁、周縁即中心といったかたちで表現しうる関係性をいかに精確に捉え直すのかという問題におおむね置換可能である。一見して、この表現は論理的な矛盾に思われるかもしれない。しかし、その矛盾つまりはパラドクスを、解消すべき難題としてではなく、正面から向かい合うべき課題として受け止め、これを生産的に議論できるかもしれない。その議論は、空間的なメタファーに依拠して周縁を中心と区別した『周縁観光論』とは異なる脱空間論的な視座から、周縁観光論のオルタナティブを探究する方向性に向かうことになる。パラドクス論を組み込み、現代観光の周縁に関する新たな理論的・民族誌的考察を開始すること、これが本研究の目指す新たな周縁観光論である。

本節では、本研究が『周縁観光論』において残された宿題への回答として、人類学的パラドクス論の探究という議論枠組みを立てて現代観光の周縁の探究に再着手するものであることを述べてきた。その枠組みの整理や画定は第Ⅰ章で行う。なお、序言であらかじめ述べたように、本研究は、この人類学的パラドクス論を、現代の周縁的な楽園観光の事例の検討を通して探究しようとする。それについては、次節で簡単に触れることにする。

第4節 ふたたびの周縁観光論の構成

ここまでの3つの節で、本研究の理論的・方法的な前提や基盤的論点、「周縁観光論」という大枠の主題設定、前著『周縁観光論』で看過されていた問題への気づきを受けて本研究がパラドクス論という新たな議論枠組みを採用するに至る経緯、について述べてきた。本節では、序章の締めく

くりとして、本研究の以下の議論構成について確認しておく。

前著『周縁観光論』とおなじく、本研究もまた、取り上げるトピックについてはさまざまな可能性が考えられるが、以下では5つのトピックを設定し、それらをゆるやかにまとめる議論方向性を目指す。これが以下の各章の議論となる。

第Ⅰ章では、人類学的パラドクス論が具体的にいかなるものであるのか、その概要を論じる。われわれの生きる社会的現実のパラドクスに満ちている。それゆえ、パラドクスは人類学の研究対象にふさわしい⁵。しかし、これまでの人類学やその周辺諸学の議論は、パラドクスを明確に概念規定しないまま、あれこれの具体的なパラドクスを論じてきた。パラドクスの概念規定やその特徴の解明は、哲学・論理学・数学といった分野の諸研究にもっぱら委ねられたかたちであった。しかし、これら哲学系の諸研究の一義の対象は抽象的な論理空間の中にあるパラドクスである。それら先行研究では、社会的現実つまりは社会空間の中にあるパラドクスを論じる際に、哲学系のパラドクス論の公理や前提をそのまま転用してよいのかどうかは検討されていなかった⁶。第Ⅰ章では、まず哲学系のパラドクス論を参照し、本研究において使用する「パラドクス」概念を狭義と広義の2つの定義に分け、また後者を「矛盾」や「逆説」といった含意を含むものと暫定的に画定する。そして、哲学系のパラドクス論の公理や前提を社会空間におけるパラドクス論に転用することの可否を検討した上で、社会空間にある民族誌的事実を扱う人類学的パラドクス論が哲学系のパラドクス論と異なる特徴をもつものとなることを論じる。その際、人類学的パラドクス論の議論対象はきわめて広範囲におよぶため、議論対象を適切に絞り込む必要があることも指摘する。本研究が、現代観光の周縁的事象とくに周縁的な楽園観光の民族誌的事例に照準を当てるのは、こうした絞り込みのためのひとつの議論選択である。このように、第Ⅰ章では人類学的パラドクス論という本研究固有の理論的枠組みを明確にする。

次に、現代の楽園観光の諸事例の検討に入る前に、第Ⅱ章では、人類学的研究一般の基盤にあるパラドクスについて検討する。人類学的研究は、それ自体が社会空間の中にあるひとつの社会的事実であり社会現象であって、そこにパラドクスが内在することは何ら不思議なことではない。第Ⅱ

5 楽園観光に関する先行研究から、ひとつ具体例を挙げておく。市野澤は、タイのプーケットの観光ダイビング産業を、リスクの資源化という観点から主題化した（市野澤 2014）。スクーバ・ダイビングには事故リスクが伴う。だが、顧客たるダイバーにとって望ましくないこのリスクこそ、ダイビング事業者側にとっては商機を生む有用な資源である、と市野澤はいう。ダイビングライセンスの取得とそれにもとづくダイビング実践が、たとえば自動車の運転免許の取得とそれにもとづく自動車運転と、リスクの資源化という点でいかなる違いがあるのかについて、市野澤は踏み込んだ指摘をしていない。ただ、私見では、市野澤がリスクの資源化を生む構造とみなす「教育の故意的失敗」という論点を導く前に指摘する「矛盾の組み合わせ」こそ、観光ダイビング産業のリスク資源化の際立った特性である。すなわち、ダイビング産業は一般のダイバーに「完全に矛盾する」メッセージを発している。(1)ダイビングは致命的な危険をはらむ活動であるが、(適切なリスク管理をすれば)安全である、(2)ライセンス取得者は監督者なしで潜水できる自立したダイバーであるが、ダイブショップを通さず（ガイドをつけず）に勝手に潜ってはならない、(3)ダイバーは自身の安全管理に責任をもたなければならないが、安全確保のためにはガイドをつけるべきである、といったものである（市野澤 2014: 143-147）。一方で安全を謳い、他方で危険を強調し、ガイドを伴っての潜水を事実上義務化している——つねに自動車学校教官を伴っての自動車運転を義務化することとパラレルである——のである。「矛盾の組み合わせ」たるダイビング産業のパラドクスと、これを脱パラドクス化したところに出現する資源化・商品化の構造に注目した市野澤の考察は、秀逸な人類学的パラドクス論である、と私は考える。ただし、そこでは、パラドクスをめぐる理論的検討は割愛されている。

6 この点で、パラドクス研究とリスク研究とは対照的である。リスク研究では、社会学を中心に、おおくの理論研究と社会的事実にもとづく事例研究とが生産され、両者を交差させる研究も一定の蓄積を有する（ex. 東・市野澤・木村・飯田（編）2014; 須藤 2021; ベック 2003 (2002+1997), 2014 (1999/1993); ベック・ギデンズ&ラッシュ 1997 (1994); 三上 2010, 2013; 山口節 2002; ライアン 2002 (2001), 2010 (2009), 2019 (2018); ルーマン 2014 (1991)）。しかし、パラドクス研究では、社会学や人類学の立場からの理論研究がほとんどなく、事例研究も体系的とはいえない。第Ⅰ章であらためて論じるように、パラドクス概念は、根本的な解決不可能性を特徴とし、この点でリスク概念と共通性をもつ。しかし、研究蓄積の点では、リスク論におおきく遅れをとっている。

章で取り上げるのは、文化相対主義とそこに内包される「相対主義のパラドクス」である。既存の人類学的研究では、文化相対主義という主張や立場がある種のパラドクス——第Ⅰ章で「狭義のパラドクス」あるいは「逆理」と呼ぶもの——を内包していることは見過ごされてきた。しかし、文化相対主義を認識基盤とする、あるいはすくなくとも文化相対主義という主張や立場を否定しない立場に立つ、人類学的研究一般は、本研究も含めて、その基底にこのパラドクスを抱えていることになる。第Ⅱ章では、人類学的パラドクス論の事例研究の口火を切るに際し、この文化相対主義がはらむパラドクスを取り上げ、パラドクスに正面から向かい合うという、本章第3節で言及し第Ⅰ章であらためて論じる本研究の重要な論点について確認する。この第Ⅱ章の議論は、人類学的研究もまた人類学的パラドクス論の研究対象になるという再帰的な関係性を組み込んだ議論の構えを本研究が採っていることを、確認するためのものでもある。

なお、この文化相対主義のほかにも、人類学の理論や方法の基盤にパラドクスを見出すことはできる。たとえば、人類学者は、フィールドワークにおいて自身が得た民族誌的データの限定性・部分性・一面性を十分自覚しているはずであるが、これを民族誌的記述や研究論文に乘せる段階では、そのデータを民族誌的「事実」へとある意味で格上げし、一定の一般性と妥当性を保持したもののように扱い語るといふ、ときに半ば無自覚な切り替えを行っている。この切り替えと語り方には、論理的な非一貫性つまりは矛盾があるといえるのではないだろうか。また、こうした自身の経験に照らせば、人類学者の書く民族誌や論文に書かれた「事実」の一般性や妥当性に慎重かつ厳しい態度で臨むべきことは明らかであるが、にもかかわらず、他の人類学者による記述の一般性・妥当性をやや素朴に信頼しようとする態度にも、論理的な非一貫性が潜んでいるのではないだろうか。

周知のように、こうした問題は、1980年代にポストモダン人類学によってかなりの程度明確化された。「部分的真実」や民族誌的リアリズム批判といったポストモダン人類学が提起した論点は、人類学者の記述における、一般性・妥当性をもった議論の構築を目指すベクトルと、限定性・部分性や解釈のゆらぎに着目し議論の脱構築を目指すベクトルという、相容れない議論軸のせめぎあいや並存を可視化させた。マリノフスキ以降の科学を志向する人類学的研究は、これら相容れないベクトルを張り合わせたところに成立するものにほかならなかった。ただし、そうした2つのベクトルを同時に保持する人類学の構えに内在する矛盾を否定的に取り上げ批判することが重要であったわけではない。むしろ、中には批判されるべき点——たとえば研究倫理上の——もあったであろう。ただ、ポストモダン人類学のいささか文芸評論に傾斜した観点や主張に惑わされずに、人類学的研究——人類学のみならず人文社会科学ないし科学一般に拡大して考えるべきである——の中に本来そうした矛盾やパラドクスが内在することを真摯に受け止め、その上で議論の構築に向かうべきことを再確認することこそ、重要であったと考えられる⁷（吉田 2005a: 12-15, 20-47; cf. 岩竹（編）1996; クリフォード 2003(1988); クリフォード&マークス（編）1996(1986); マークス&フィッシャー 1989(1986); ロサルド 1998(1989); Ortner 1994(1984)）。ポストモダン人類学はこうした矛盾やパラドクスを可視化する貢献を果たした。ただし、このことはこの場で確認しておくことでさしあたり十分であろう。第Ⅱ章では、文化相対主義に焦点を絞り、人類学的研究の基盤にあるパラドクスを検討する。

7 もっとも、ポストモダン人類学の立場からの主張やその妥当性は、かならずしも十分正確に理解されてきたとはいえない。たとえば、ロサルドの「テントの入口から」（ロサルド 1996(1986)）という論文の主張は、人類学的パラドクス論の観点からすれば、もっとも論理的に——ただ、そこにパラドキシカルな構えをおそらく意図的に埋め込んだかたちで——ポストモダン人類学の主張を提示したものと考えられるが、そのことを評価した議論は、管見のかぎりない。これについては、あらためて別稿で論じたい。

さて、第Ⅲ章以下では、議論を現代の楽園観光の周縁的な民族誌的事例の検討へと展開する。大衆観光型に近い楽園観光の諸形態は、拙書『反楽園観光論』（吉田 2013b）の中で取り上げたこともあり、本研究では、2020年代に見られる、21世紀の周縁的な楽園観光の諸形態の中から3つのトピックを取り上げ、検討していく。

第Ⅲ章で取り上げるのは宇宙観光である。本研究でいう宇宙観光は、地球の重力や厚い大気の外にある高度100キロメートル近くまたはそれ以上に向かう観光を指す（第Ⅲ章第4節第1項）。21世紀に芽吹いた宇宙観光は、まだ初発の段階にあり、この点で20世紀前半に立ち上げられた初期の楽園観光と類似する特徴をもっている。また、後者が生活圏の彼方にある地上の楽園に向かう水平軸の旅であるのに対し、前者は地上の生活圏の彼方にある天空（空域と宇宙）に向かう垂直軸の旅であるという対比も成り立つ⁸。第Ⅲ章では、まず、あらためて現代観光の背景にある制度メカニズム——ポスト工業社会化、消費社会化、情報社会化、とくにデジタル化——に目配りしながら、現代観光の諸特徴を整理する。その上で、現代観光の先端に位置するとともに、おおくの人々に開かれた観光商品になりえていない点では周縁に位置するともいえる宇宙観光について、近い将来に実現が確実視されている月旅行などにも目配りしながら記述する。そして、現代のデジタル社会の先端的諸技術に支えられた宇宙観光が、アナログ的な魅力の追求にその本質的特徴を有するという「逆説」ないし倒錯を明らかにする。

第Ⅳ章では、宇宙観光とはまた別種の、現代の周縁的な楽園観光の形態を取り上げる。それは、ムスリムのマッカ巡礼⁹と一体化した「地上の楽園」観光である。現代における主要なあるいは支配的な楽園観光の形態——ハワイ観光や沖縄観光に代表される——は、旧約聖書の「エデンの園」を原型とし西欧キリスト教世界の近代化の過程において練り上げられ世俗化されていった楽園表象に支えられ、日本など非キリスト教世界にも浸透しグローバルに展開していったものである。こうした楽園観光の成立の経緯は『反楽園観光論』第Ⅳ章で詳述した（吉田 2013b: 113–153）。また、この水平軸の楽園観光の新展開である垂直軸の彼岸に向かう楽園観光つまり宇宙観光は、第Ⅲ章で取り上げる。この第Ⅳ章で取り上げるのは、やはり旧約聖書の「エデンの園」を原型とするが、イスラーム世界において受容された楽園表象とイスラームの宗教実践に支えられ、世俗化とはかならずしもいえない別様の近代化や合理化の過程において確立され、グローバルに実行されている、地上の楽園観光のオルタナティブである。

世界中のムスリムは、一生に一度は聖地マッカに巡礼したいと切望する。マッカ巡礼には小巡礼

⁸ ここでいう初期の楽園観光とは、20世紀後半の大衆観光時代以前の、第一次世界大戦後の欧米人による楽園観光を指している。この時代、ホスト側のゲスト受け入れ態勢は決して十分なものではなかった。19世紀後半のオリエンタリストや印象派・後期印象派の画家たちがイスラーム圏・南米・太平洋に旅した時代に比べれば、旅程や現地滞在の快適さは高まったが、世界の辺境の地に点在する楽園観光地の物質面および人的サービス面でのホスピタリティは、西欧から来訪した富裕層にとって十分満足できるものではなかった。しかし、多少の苦難や居心地悪さを承知の上で、高額のコストを支払って、当時の一部の富裕層は、好奇心や憧れに駆られ、自然・文化の異質性を味わうべく、遠方にある地上の楽園に向かった（吉田 2013b: 132–142, 2021b: 11–19, 37–42）。第Ⅲ章であらためて述べるように、現代の宇宙観光においてもまた、多少の苦難や居心地悪さを承知の上で、高額のコストを支払って、一部の富裕層は、好奇心や憧れに駆られ、地球外の眺望と微小重力体験といった異質性を味わうべく、酸素も水もない宇宙に向かう。宇宙観光の実践者に「楽園」を訪れるという認識はあまりないであろうが、彼らの行為は、生活圏とは異なる「彼岸」への好奇心や憧れにもとづくという点において、初期の地上の楽園観光と共通の特徴をもつ。

⁹ イスラーム第1の聖地であるマッカは、正式にはマッカ・アル＝ムカッラマ（Makkah al-Mukarrama; 祝福されたマッカ）であるが、本研究ではその略称である「マッカ」の表記をもちいる。同様に、第2の聖地であるマディーナは、正式にはアル＝マディーナ・アル＝ムナウワラ（al-Madīna al-Munawwara; 光り輝くマディーナ）であるが、「マディーナ」の略称をもちいる（大塚・小杉他（編）2002: 914–915, 919–920）。これまで日本では「メッカ」という表記が一般的であったが、アラビア語でもインドネシア語でも「マッカ」が一般的である。なお、インドネシア人ムスリムはこれをときに「マッカ」よりもむしろ「ムッカ」に近い音で発音するが、本研究では「マッカ」と表記することにする。

と大巡礼とがあり、ムスリムの義務とされるのは「ハッジ」(hajj) と呼ばれる大巡礼の方である。ただし、高額のコスト——アジアや欧米からは旅費だけで100万円以上——がかかり、また、自身の巡礼中に残留する家族の生活を維持できなければハッジに行く資格はないとされるので、行ける者が行けばよい、とされている(第IV章第3節第2項)。ところで、この大巡礼の前か後に、サウディアラビア国外からやって来るムスリムは、第2の聖地マディーナにある預言者ムハンマドの墓や屋敷を含む「預言者マスジド」をも訪れる(Wheeler 2019: 57)。この預言者マスジドへの参詣は大巡礼の一環ではないが(第IV章脚注4)、この2つの聖地の訪問はいわばセットになっているのが実態である。この預言者マスジドの中には、ムスリムが「地上の楽園」とみなす場所がある。ムスリムは、旧約聖書にあるエデンの園に対応するこの地上の楽園を訪れ、礼拝することを望む。地上の楽園をその内に抱える預言者マスジドへの訪問は、ムスリムにとって、マッカ巡礼に付帯した半ば宗教的であるとともに半ば世俗的でもある楽園観光なのである。

第IV章では、マッカ巡礼とともにこの地上の楽園を訪れることに強い憧れを抱いていたひとりの日本在住インドネシア人ムスリマ——サヤン氏(仮名、2023年時点で40代後半)と呼ぶことにする——に焦点を当て¹⁰、彼女が2023年の巡礼月に実行したマッカ大巡礼と楽園観光を、彼女を含む日本在住インドネシア人ムスリムがおかれている社会的・時代的背景に目配りしながら記述する。そして、現代のマッカ巡礼がこの楽園観光と結合しパッケージ観光化されている点に着目する。このパッケージ観光化は、マッカ巡礼という宗教実践の世俗的合理化であると捉えれば、そこにある種の「逆説」を見出すことはできる。では、当の「巡礼+観光」のホスト側・ゲスト側のムスリムは、どう捉えているのであろうか。章の総括部分では、こうした観点から大巡礼と楽園観光との統合体を理解する。なお、第IV章は、非ムスリムの読者のためにイスラームに関する基本知識の確認から説き起こすため、いささか大部の記述となることを、あらかじめお断りしておく。

第III章・第IV章では、天空の楽園・地上の楽園へと一時的に旅する現代の周縁的な楽園観光の具体例を取り上げるが、第V章では、私が35年以上にわたって定点観測をつづけてきた、インドネシアの楽園観光地バリ島のウブドに長期的に滞在する／した日本人移住者を取り上げる。ウブドの日本人移住者は、楽園バリの中での周縁的な観光地で暮らすことを選択した周縁的な観光主体といえる(吉田 2023a: 31)。議論の焦点は、彼ら日本人移住者にとっての「楽園バリ」が、ポストコロナ期にひとつの節目を迎えつつあることにある。

バリ島中部にある中規模観光地ウブドとその周辺には、1990年代からコロナ禍前にかけて100名をこえる——数百名ともいわれる——日本人が中長期滞在し生活していた。私は、当初、彼らのビジネスに着目していたが、途中からはライフスタイル移住論を参照しつつ、彼らを広義の観光者(移住=観光者)と捉える観点に立ち、そのバリでの生に関する民族誌的記述を積み重ねた¹¹(吉田 2004, 2005b, 2013b: 231–277, 2019, 2020a: 265–285, 2021b: 173–186, 2023a: 131–161)。彼らの中には、憧れの「楽園バリ」での暮らしを堪能しすでに鬼籍に入った者もいれば、配偶者や子・孫とともにバリでの暮らしを今後もつづけると思われる者もいる。ただ、他方では、自らが描いたバリでの暮

10 ムスリム (muslim) は男女を含むイスラーム教徒を、ムスリマ (muslimah) はムスリム女性を意味するアラビア語である(大塚・小杉他(編) 2002: 969–970; 野中 2015: xiii)。インドネシア人ムスリムは、男女を含む意味で「ムスリム」や「ムスリミン」(muslimin) という語を自称・他称に頻用する。本研究では、「ムスリム」を男女合わせたイスラーム教徒を意味する語としてもちい、女性に限定する場合に「ムスリマ」の語をもちいる。

11 ライフスタイル移住論については、『周縁観光論』第IV章で整理した(吉田 2023a: 135–136)。中長期の移住と短期の観光滞在とをかならずしも明確に区分しないことがこの種の研究のひとつの特徴である。なお、これを「ライフスタイルツーリズム」と表現することもある(小野 2019; 中植 2023)。

らしをあきらめて日本に帰る者や、ふたたびバリに戻る計画をもちながらも諸般の事情からそれを果たせずに日本で暮らす者もいる。本研究が焦点を当てるのは、前者のような楽園バリでの暮らしを謳歌する／した人々ではなく、楽園暮らしの理想と現実に引き裂かれたり、日本人としてバリに生きるという暮らしぶりのアンビヴァレンスの中でゆらぐ生を送ったりする人々である。第Ⅴ章では、彼らのこのアンビヴァレンスに着目した『周縁観光論』第Ⅳ章の記述（吉田 2023a: 131-161）の延長線上において、そうした「周縁的」な日本人移住者のポストコロナ期の一端について記述し、楽園観光地バリで暮らす日本人移住者の生が抱えるパラドクスについて、カントのアンチノミー論を手掛かりに整理・考察する。

最後に、結章では、「楽園パラドクス」をめぐる議論に論及したのち、各章の議論をあらためて簡単に振り返り、周縁楽園観光論パラドクス編たる本研究を総括して論を閉じる。

では、現代観光の周縁を探究する新たな旅に向かうことにしよう。